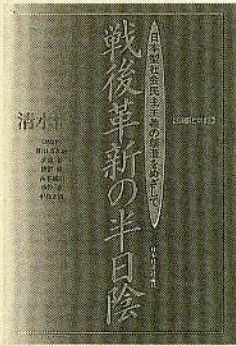


『戦後革新の半日陰』 日本型社会民主主義の創造をめざして

清水慎三著 日本経済評論社 定価3296円 479頁

大塚知行(東京新聞編集委員)



書名の『半日陰』という表現に一種名状し難い印象を受ける。著者が「まえがき」の冒頭で「日向に出る機会も2回か3回あったように思うが、たぶん強い陽ざしを受けた途端

にしぼんだであろう」と述べているように、脚光を浴びた運動家や理論家でもなく、かといって陰の策謀家でもなかった著者の生涯を表わすネーミングなのであろう。しかし、それだけでなくこの書名には「戦後革新」の低迷、とくに筆者が「革新首座」と名づけたかつての日本社会党の今日の無惨な姿に対する痛恨の想いが反映されているように思える。

筆者は「私が生涯の大半をかけてその一隅にいた左翼陣営が、生涯をとじるころになって凋落の深淵に落ちこんでいることは残念というほかはない」と慨いているが、「だが、左側通行してきたことに後悔はない」と断言し、「現体制内で、体制側と基軸価値観を異にする『対抗文化・対抗社会』領域をつくり出す」方向を目指し、それを社会主義再生の橋頭堡と位置づける。その拠点に運動として『労働者協同組合生産』『協同社会セクター形成』を、コミュニティユニオンや生活クラブ生協などともに重視している。

筆者は一応、“非共産系左派”とくに日本社会党左派の立場ながら、つねに革新勢力総体を視野に入れた運動や理論の構築を志向してきたといえる。しかしそれだけに、セクト主義的な自己絶対化・他派排撃性の強かった戦後革新諸勢力のどの勢力内でも主流を形成することはなかった。「戦後革新」から、「新しい革新」へと世代的にも移り変る今日の時点であっても、革新総体を視野に

した戦略がなければ、「社会変革」も「体制変革」もあり得ないだろう。とすれば、「新しい革新」の担い手が、戦後革新の統合戦略に腐心した著者のライフヒストリーを単なる回顧談としてばかりでなく、展望を切り開く視点として検討する意義は大きいと思われる。

総同盟から総評へと転換期に、高野実氏のプレーンとして活動。いわゆる「左社綱領論争」では一方の当事者として、向坂逸郎氏ら労農派グループの“反独占社会主義”革命論に対し“民族解放社会主義”革命論と位置づけられた「清水私案」を発表、社会党内ばかりではなく、共産党系理論家からも高く評価された。

太田・岩井時代の総評では「総評組織綱領草案」の起草責任者として、労働者が職場の主人公となる運動の中から、社会主義政治運動へと連動する活動家育成に貢献した。60年安保・三池闘争についても、運動にかかわりながら「党派エゴでなく客観性と理論的究明度が高い」と評される多くの論文を発表。「日本の社会民主主義」(岩波新書)では“社会党・総評ブロック”“左翼バネ”などの造語を生み、構造改革論争では党派間闘争の具となった「構造改革論の不幸な出発」を指摘し、反独占統一戦線への可能性が摘まれてしまったことを惜しんだ。

本書はこうした著者の生涯を、思想形成期から紹介するが、著者自身の回顧の部と、田口富久治、熊沢誠、兵藤釗氏らが対話者として、著者の真意や当時の裏話、一般的な理解とは異なる事実経過を聞き出すという対話の部が並行して進められるというユニークな方法がとられている。巻末に収められている「非共産既成革新理論家の思想と行動」(京大大学院研究会報告)の評価も極めて興味深い。